

# 末黒野

すぐろの

7月号

(通巻887号)



## 囀

公園の雲梯に子ら花木五倍子  
春満月前山いよよふつくらと  
恋猫や流し目投げてまた闇へ  
見上ぐれば山茱萸の日の微塵かな  
先読めぬ速き動きや紋黄蝶  
やはらかき沢風あやす初音かな  
山茱萸や朝日のしづく高みより  
声つなぐ島の鶯尾根の径  
参磴の幅を狭めて花馬酔木  
囀や目覚めの気持ちととのへて  
久々の園や思はぬ初桜  
川風に揺るる雪洞花万朶

森清

(全堯)

## 細魚鮓

春の川風も流れも音立てず  
朝風や影揺れもせで藤の花  
鶯の声のとどろく天下かな  
すぐそこに日暮きてをり犬ふぐり  
かげろふの駅を乗り継ぎ身延線  
亀の首伸びきつてゐる遅日かな  
雲ひとつちぎれてゆきぬ揚雲雀  
山茱萸やにはかの雨に濁る池  
大寺の小寺の落花しきりなし  
わだかまり解けてつまみぬ細魚鮓  
地震のなき地へ高々と鳥帰る  
多摩川へ山よりの風夏近し

黒滝志麻子

(顧問)

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 逃水

岡野里子

鳥帰る海の匂ひの風に乗り  
五条線刻む築地や春の雪  
稲荷社の生垣明りいたちぐさ  
師の遺句を読みをる窓辺初蝶来  
人の世の騒めき後に鳥帰る  
源平の花桃住職 顕彰碑  
公園のベンチからつぼ風光る  
大空へ芳香をかかげ紫木蓮  
磯海女や額に海光したたら  
逃水や浮いては消ゆる詩のかげら

## 花冷え

菅野日出子

膝に来る猫抱き上げて春の雪  
啓蟄や得体の知れぬウイルス禍  
春寒や子の手作りのマスクして  
籠もり居て花の便りを三春より  
孫よりの桜のメール句作にと  
外出のままならぬ日々花の雨  
いづこより庭へ舞ひ込む花の塵  
葺替への終へし古民家桜散る  
春の川人を恐れぬ小鷺二  
フリスビー追ふ柴犬や山笑ふ



## 桜

田中臥石

横浜へ外出自粛や沈丁花  
桜咲く道雪降つて来たりけり  
足馴らす径の蒲公英明かりかな  
春光や膝の水抜く注射針  
外出の自粛遠見の花の雲  
落花舞ふ残影家に帰りても  
種を蒔く娘マスクの声くぐもる  
海へ向き変へ春耕のトラクター  
壱岐島の桜海苔とや届け  
初音かな自粛籠りの耳捉らふ

## 花吹雪

森清信子

上空の黄ばみたる風花きぶし  
春宵のかすかに揺るる白帆かな  
留守電に白寿の母やあたたかき  
たふたふと波寄する湖残る鴨  
花木五倍子谷の深きに水の音  
思ひ出す人次つぎや夕桜  
青空を画布や大樹の花吹雪  
花吹雪風定まらぬ官庁街  
春眠の子やアジトめく六畳  
もてあます暇のストレスつくし摘む

# 乙 矢 集

配列は音順(当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ)



初 燕 加藤静江

白浪を追ふ白波や初燕  
たをやかに砂連れ帰る春の潮  
差し潮の汽水の池や雪柳  
杉の花のいよよ重たし裏高尾  
湧水の輪を遠まきに葦若葉  
風光る鵜は浮島をひとり占め  
髪切つて項に受くる桜まじ

泣き坂 小田嶋野笛

壺すみれ 斉藤マキ子

春風の動物園や日の差して  
芋棒やふと沸き上がる里心  
扁額の傾ぐ鮎屋や木の芽和  
空あればこそ花なり紅枝垂  
バス停の名は泣き坂や母子草  
曲水や浮かず沈まず雲の影  
頬白の鈴音を近く杣の道

叱られてなほ母の膝つづみ草  
とりどりの切手貼り交ぜ花だより  
恥ぢらひといふ言の葉や壺すみれ  
癒さるるまで聴くレコード風信子  
春燈や好きな言葉に線を引き  
黒板の給餌のメモや孕馬  
たんぽぽの絮を煽りぬ蝶の翅

春の雲 堺 昌子

雪濁り 長尾タイ

群青の空直線に春の雲  
早朝のみなとみらいや桜咲く  
瑞泉寺紅白の梅競ふかに  
土佐水木ほつほつと空青し  
桜咲くひゆうと風吹く公園に  
何時の間に花ほつこりと山桜  
子等の声響く公園チューリップ

花水木洋館建ての青き屋根  
山桜荒鋤きの田の黒黒と  
花筏一朵の雲を引き行けり  
水位標枝垂れしままに花乱吹く  
少年の無口となりぬ卒業期  
受験子の絵馬や祈りの声を聞く  
梓川千曲信濃と雪濁り

糸 桜 高木邦雄

さくら 今村千年

絹の雨雫連ぬる柳の芽  
はや垂る露坐仏背負ふ春の雪  
寅さんの旅の鞆や草の餅  
声のなき校庭染むる桜しべ  
糸桜風しなやかに受け流す  
萌黄なる上枝の葉影鳥交る  
青き踏む肩甲骨を回しつつ

花衣てふ言の葉美し八坂道  
眼裏に生家の庭や紅しだれ  
さくら散る君のかんばせさくら色  
永き日の老人パスの物見かな  
夕餉まで少し間のある日の永さ  
しばらくは濁世を覆ふ春の雪  
大いなる退屈連れて黄砂来る

# 青炎集

## 黒滝志麻子選



横浜 是松三雄

沖待ちの白き客船かぎろへり  
**花散らす風のおくなき姑みかな**  
花曇動く気配のなき釣師  
絶え間なく降る花びらを掃き小僧  
旅の宿花片の舞ふ露天の湯  
春愁やウイルス避くる塾居の身

横浜 山口郁子

芝青み足裏弾むや布草履  
桜樹叩く春の小啄木鳥や背を立てて  
街景色にはかに変へる春の雪  
田楽の串より垂るる味噌の照り  
都忘れ器選ばぬ品のよさ  
**三味線草揺さぶる風に音出さう**

日野 中村月代

マスクいま今かと亀の鳴く夕べ  
**亀鳴けり医者か患者となりしとは**  
覗き込む紅白帽や犬ふぐり  
のんちやんの雲に乗りたき万愚節  
我が庭の花の盛りをちさく誉め  
明易し明り障子に指の窓

横浜 横路尚子

うららかや漁る小舟のゆらゆらと  
**さ緑の木の間飛び交ふ初燕**  
雨にけぶる桜柵引く雲のごと  
自肅てふ一人歩きや花の道  
桜薬降り残る枝紅に染め  
群れ集ひ水脈整ふる春の鴨

横浜 山崎稔子

**谷向ひの屋根のいろいろ春の雪**  
遍しや草に大樹に木の芽雨  
洞持てる老樹の幹や花一輪  
ウイルス禍託つ電話や花の昼  
くぐもれる汽笛の遠く花の雨  
花冷えの墨痕著き卒塔婆かな

横浜 野村重子

**桜隠しの幻想の世に迷ひけり**  
淡雪や若き日の夢遠くなり  
さみどりの膨らむ芽立ち雑木山  
花満ちて黒き太幹際立てり  
ウイルス憂ふ子よりの荷物花曇  
星見えず空に一舟春の月

横浜 長尾良子

休校の庭に満開夕桜  
醍醐寺の桜吹雪や令和の世  
中天に大満月や春の宵  
星見えず夜半の団地や春灯  
**遠景の野山彩増す穀雨かな**  
里山へ弾む足取り木の芽風

横浜 鈴木友子

暮れ泥む遠山淡し夕桜  
紅引くや小枝に重き忘れ雪  
花の雨の二胡のカセット音低く  
読み返す虚子の句集や春深む  
**ポスト迄行き交ふ春のマスクかな**  
しつかりとほぐるる迄を白牡丹

横浜 谷貝美世

あかぎれの春まだ痛し足の裏  
春風や波のかなたの島ひとつ  
花のごとビニール傘に春の雪  
**自然林の囲む公園春の風**  
三月や予定消えゆくウイルス禍  
すべり台の子等の歓声チューリップ

浦安 東正則

**茅花野や風神の息降り掛かり**  
流水の芸術めくや春の磯  
てふてふの舞や何処へ友逝きぬ  
原子炉の津取る誰ぞ風光る  
春昼や床へほろりと葉落ち  
春陰の図書館閉まり散歩かな

# 耕 土 集

森清 堯選

春月や闇に浮かぶる天守閣  
せせらぎに速く遅くと花筏  
老桜雨に煙れる大手門  
通信の句会となりぬ鳥曇  
何もちて時を計るや帰る鳥

横浜 大内 由紀

朝東風や仏間の窓を少し開け  
春筍を買ふや弓手に持つ重さ  
傷多き俎板春の水流し  
山うどを食ふ夫の齒の白さかな  
消しゴムの減りてまんまる進級子

横浜 小原 紀子

お祝ひ懇ろに書き花の昼  
ちちははの墓域に降りぬ匂鳥  
鳥雲にその先の道ありますか  
少しづつ手を抜き老いの春料理  
満天星の花びつしりの垣根かな

横浜 小池 桃代

校服の違ふ二人や花の下  
半円に繞りて振れて団子花  
学び舎の花の散り来る生家かな  
三姉妹橋より散ず花の屑  
二階より母の指示声剪定す

横浜 宮之原隆雄

時ならぬウイルス恐怖花の冷  
春の昼樟の根方に眠る猫  
春満月しをり挟みて消す明かり  
春燈や霧消のあとの地図の旅  
日輪を仰ぐや園の花の下

横浜 佐藤 勝代

日の残る橋の向かうや紫木蓮  
色変へて海へ空へと石鹼玉  
何をする事なく過ごしヒヤシンス  
隠りたるふた月あまり春炬燵  
またひとつ予定を消すや春愁

横浜 玉川 利江

説法の合間を透る初音かな  
両の手に心もとなく別れ雪  
春の風邪を加齢と笑ひ若き医師  
禍も何も彼も夢万愚節  
道祖神疫を止むるや暮の春

横浜 喜田 君江

剪定や夫の軍手の真新し  
春一番土手にふんばるシヨベルカー  
嵐去り破璃に貼り付く桃の花  
春雪やクロスワード解く間  
夕さりの庭を横切る子猫かな

横浜 大庭美智代

やはらかき光をのせて春の波  
一片の花びら風と訪ひくれぬ  
白木蓮真青なる空カンバスに  
花粉症の咳や鋭き視線浴び  
瀬戸内の沖の白浪松の花

横浜 杉山 善信

春の野やおいてけぼりのぬひくろみ  
黒牛の五頭を沈め山笑ふ  
リズムカルに触れては離し紙風船  
黄水仙由緒を記す道祖神  
葦牙やコロナウイルス其処彼処

横浜 与田 幸江

日輪の影を零さず若楓  
漣の揺らめく影や蝌蚪の群  
運動場ぼつねんと立つ八重桜  
ポール繞る棒高跳や初燕  
巣づくりの飛び交ふ羽音外廊下

印西 大坂 正

水鏡触先へ迫る花筏  
水温む海石を撫つる緩き波  
暮つ方足跡多き潮干湯  
三月尽シヨパン流るる商店街  
散る花の紅を尽せり遊歩道

横須賀 久保寺眞佐子

妻よりも多き錠剤蜆汁  
口で割る駅弁の箸春浅し  
住みし地はどこも古里夕桜  
老夫婦乗る人力車若葉風  
神木の無骨なる瘤青嵐

横浜 和田 啓

蒼天へ木蓮百の白かかげ  
花散らす風の悪戯川の面  
重ね合ふ言の葉うらら垣根越し  
空掴むかに大樹の枝や春夕焼  
茶碗蒸し夫の好みの三葉入れ

横浜 秋山 文子

ひこばえや百年の樹を伐りしあと  
春月や芭蕉の知らぬかくや姫  
開発を拒む城址や鳥交る  
さりながら花見やくぐる仁王門  
花筏岩より亀の見入りたる

横浜 伊藤 鴉